

# 高槻市男女共同参画に関する市民意識調査報告書の概要

案件1について、【資料1】市民意識調査報告書(案)の概要を事務局でとりまとめましたので、資料1の図・表と照らし合わせてご覧ください。  
経年変化があったものなど主要項目についてはピックアップし囲んで表示しています。

## I 調査の概要

### 1. 調査の目的 (P1)

男女がお互いの人権を尊重し、社会のあらゆる分野の活動に参画する男女共同参画社会の実現を目指すにあたって、今後の総合的かつ効果的な施策や計画を検討するための資料を得ることを目的とします。

### 2. 調査の方法 (P1)

#### ■市民意識調査

- ①調査地域 高槻市全域
- ②調査対象 満18歳以上の市民(令和3年6月現在)
- ③調査対象者数 2,300人
- ④抽出方法 住民基本台帳からの年齢別・男女別層化無作為抽出
- ⑤実施方法 郵送による調査票の配付と回収、及び葉書による督促1回
- ⑥調査期間 令和3年(2021年)8月20日～9月30日

#### ■小学生から高校生へのアンケート調査

- ①調査対象 市内の学校に通学する小学5年生・中学2年生・高校2年生
- ②調査対象者数 小学5年生 563人・中学2年生 653人・高校2年生 471人
- ③抽出方法 教育委員会を通して、市内小・中学校に依頼、市内高校に直接依頼
- ④実施方法 児童・生徒に調査票を手渡し、後日、回収するという方式、または教室に集合した児童・生徒が定められた時間内にその場で調査票を記入する方式とし、どちらの方式で実施するかは、学校ないしクラス担任の判断に任せた
- ⑤調査期間 令和3年(2021年)9月8日～10月5日

### 3. 回収結果 (P2)

#### ■市民意識調査

	発送数 (A)	回収数 (B)	回収率 (B÷A)	有効回収数 (C)	有効回収率 (C÷A)	無効数 (C-B)
市民意識調査	2,300	1,120	48.7%	<b>1,117</b>	<b>48.6%</b>	3
標準抽出	2,000	1,024	51.2%	1,023	51.2%	1
追加抽出	300	96	32.0%	94	31.3%	2

※10・20歳代については、若年層の意識分析に必要な回収数を得るため、年齢構成別に設定した標本数2,000人に加え、18～19歳51人、20歳代249人を各々追加抽出し、調査票を発送した。追加抽出により回答を得たサンプルは、年代別集計に限り含めて集計を行っており、全体集計、設問間のクロス集計、経年比較、大阪府調査との比較では追加抽出したサンプルは含めていない。

#### ■小学生から高校生へのアンケート調査

	配付数 (A)	回収数 (B)	回収率 (B÷A)	有効回収数 (C)	有効回収率 (C÷A)	無効数 (C-B)
小学生	563	529	94.0%	528	<b>93.8%</b>	1
中学生	653	594	91.0%	594	<b>91.0%</b>	-
高校生	471	450	95.5%	450	<b>95.5%</b>	-

## II 市民意識調査の結果

※二重括弧（『…』）は2つの選択肢を合計したことを表す。

例：『そう思う』＝「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計

『そう思わない』＝「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」の合計

### 1. 回答者の属性について（P5～）

- (1) 性別 「女性」が59.9%、「男性」が38.3%。(P5・図 F1)
- (2) 年齢構成 「70歳以上」が31.3%、次いで「50歳代」17.5%、「40歳代」16.3%  
50歳代以上の年代が全体の6割以上を占める。(P5・図 F2)
- (3) 配偶関係 「結婚している(パートナーも含む)」が70.7%と最も高い。(P6・図 F3)
- (4) 就業状態 「共働きである」が45.2%、「どちらも働いていない」が28.9%。(P6・図 F4)
- (5) 職業 女性は「非正規社員・職員(パート・アルバイト)」、「家事専業(主婦・主夫)」、「正規社員・正規職員」がいずれも約2割。  
男性は「正規社員・正規職員」44.9%、「定年退職者」20.7%、「無職」11.5%。(P7・図 F5)

### 2. 男女平等について（P8～）

#### 【問1】結婚や家族に関する考え方（P8～）

男女とも『そう思う』（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）が6割を超えるのは、(ア)(イ)(キ)。  
『そう思わない』（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計）が5割を超えるのは、(オ)(カ)。  
すべて項目で、若年層と高齢層で考え方の違いがあり、年代別の差が顕著である。

#### (ア) 結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくても、どちらでもよい

- ・『そう思う』は、女性で85.2%、男性で78.8%と女性の方がやや高くなっている。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、女性では『そう思う』は年代が下がるほど割合が高くなっており、50歳代以下はいずれも9割を超える。男性では『そう思う』は30歳代で最も高く100%となっている。(P11・表 1-1)

#### (イ) 結婚しても、必ずしも子どもをもつ必要はない

- ・性別でみると、『そう思う』は、女性73.4%、男性66.4%。女性は「そう思う」が5割を超える。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、男女とも年代が下がるほど『そう思う』の割合が高くなっており、30歳代以下は「そう思う」が女性で8割、男性で7割を超えている。(P11・表 1-2)

#### (ウ) 結婚したら、夫婦は同じ姓を名乗るべきだ

- ・性別でみると、『そう思う』は、女性で48.4%、男性で55.7%と男性の方が高く5割を超える。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、男女とも年代が上がるほど「そう思う」の割合が高くなる傾向にあり、70歳以上では『そう思う』は7割以上。男女とも30歳代以下は「そう思わない」が3割を超え、他の年齢層に比べ高い。(P12・表 1-3)

#### (エ) 子どもが3歳くらいまでは、母親が育児に専念したほうがよい

- ・性別でみると、『そう思う』は、女性で49.0%、男性で54.3%と、男性の方がやや高く5割を超える。『そう思わない』は、女性で37.0%、男性で31.9%。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、『そう思う』は、男女とも70歳以上で7割を超え、高くなっている。男性の40歳代では『そう思う』が58.9%で、同年代の女性と比べ26.2ポイント高くなっている。(P12・表 1-4)

#### (オ) 夫は外で働き、妻は家庭を守るほうがよい

- ・『そう思わない』は、女性で 62.2%、男性で 56.2%。女性は「そう思わない」が約5割を占める。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、女性では年代が下がるほど『そう思わない』が高くなっており、10・20 歳代で 85.4%。男性では 30 歳代で『そう思わない』が 77.1%と高くなっている。(P13・表 1-5)
- ・経年比較をみると、男女ともに「そう思わない」が大幅に増え、男女とも約 40 ポイント増加。(P14・図 1-4)



**「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担意識に否定する割合が大幅に増え、男性も半数を超える。意識の変化がみられる。**

#### (カ) 妻が働きに出る場合は、フルタイムの仕事避け、パート・アルバイトなどにとどめるべきだ

- ・『そう思う』が 20.7%、『そう思わない』が 65.6%、「どちらともいえない」が 12.6%となっている。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、女性では年代が下がるほど「そう思わない」が高くなる傾向にあり、30 歳代以下で7割を超える。70 歳以上では『そう思う』が 40.2%と高く、男女の年齢層の中で最も高くなっている。(P15・表 1-6)

#### (キ) 妻が働いていなくても、夫は家事・育児をするほうがよい

- ・『そう思う』は、女性で 79.1%、男性で 69.7%と女性の方が高く、『そう思わない』は、女性で 13.6%、男性で 18.4%と男性の方が高い。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、女性では『そう思う』は 60 歳代以下で8割以上と高くなっている。男性では年代が下がるほど『そう思う』は高くなっており、10・20 歳代で 86.6%。(P15・表 1-7)

#### (ク) 自分の家族や親戚が未婚のまま子どもを産むことは好ましくない

- ・『そう思う』は、女性で 57.6%、男性で 66.1%と男性の方が高く、『そう思わない』は、女性で 28.6%、男性で 22.5%と女性の方が高くなっている。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、男女ともに年代が上がるほど『そう思う』が高くなる傾向にあり、70 歳以上は7割。男女ともに 30 歳代以下では『そう思う』と『そう思わない』の割合はいずれも4割台と拮抗している。男性の 40 歳代、50 歳代では同年代の女性と比べ『そう思う』の割合が高く、40 歳代で 21.6 ポイント、50 歳代で 17.8 ポイント高くなっている。(P16・表 1-8)

#### (ケ) 男同士、女同士の結婚を認めるべきだ

- ・『そう思う』は、女性で 49.4%、男性で 35.8%と女性の方が高い。『そう思わない』は、女性で 24.9%、男性で 44.2%と男性の方が 19.3 ポイント高い。男女ともに「どちらともいえない」が2割前後。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、男女ともに 30 歳代以下で「そう思う」が高く、女性の 10・20 歳代で 57.8%。『そう思わない』は女性の 70 歳以上、男性の 60 歳代以上で 5 割を超え、男性の 70 歳以上は 65.3%。(P16・表 1-9)

#### (コ) 自分の家族や親戚に同性愛者はいてほしくない

- ・性別でみると、『そう思う』は、女性で 40.1%、男性で 54.0%と男性の方が高く、『そう思わない』は、女性で 40.4%、男性で 30.1%と女性の方が高くなっている。(P10・図 1-2)
- ・年代別にみると、男女ともに年代が上がるほど『そう思う』は高くなっており、70 歳以上では7割以上。一方、男女ともに 10・20 歳代で『そう思わない』の割合が7割以上。女性の 40 歳代、60 歳代と男性の 50 歳代では、2割以上が「どちらともいえない」と回答している。(P17・表 1-10)

### 【問2】男女の地位の平等感（P18～）

- ・「職場」「社会通念や慣習の面」「政治の場」「経済界」「社会全体」の分野で、『男性優遇』（「男性が優遇されている」と「どちらかといえば男性が優遇されている」の合計）の割合が5割を超えている。特に「経済界」「政治の場」「社会全体」で『男性優遇』が7割を超える。（P18・図 2-1）
- ・『女性優遇』（「女性が優遇されている」と「どちらかといえば女性が優遇されている」の合計）の割合は、いずれの分野も低く10%未満。（P18・図 2-1）
- ・「平等である」の割合が唯一5割を超えているのは、「学校教育の場」で、最も低いのは「経済界」となっている。（P18・図 2-1）
- ・性別で見ると、すべての分野で『男性優遇』の割合は女性の方が高くなっている。一方、すべての分野で「平等である」の割合は男性の方が高い。（P19・図 2-2）



**すべての分野で『男性優遇』の割合は女性の方が高く、性差が大きい。  
男女で意識の違いがあり、男性よりも女性の方が不平等であると感じていると思われる。**

### 【問3】家庭における様々な役割について男女どちらが担うのがよいと思うか（P25～）

- ・「生活費をかせぐ」「育児（乳幼児の世話）」以外の項目で、「男女が同じ程度」の割合が最も高い。「老親や病身者の介護や看護」と「子どもの教育としつけ」では7割台と高くなっている。（P25・図 3-1）
- ・『いつも女性』（「いつも女性」と「主に女性で男性が補助」の合計）の割合が高いのは、「日常の買い物」と「育児（乳幼児の世話）」でいずれも5割を超えている。（P25・図 3-1）
- ・『いつも男性』（「いつも男性」と「主に男性で女性が補助」の合計）の割合は、「生活費をかせぐ」（60.7%）と「自治会、町内会など地域活動への参加」（17.1%）以外はいずれも5%以下。（P25・図 3-1）



**「男女が同じ程度」という考えが多くなってきているものの、依然として男性が生活費を稼ぎ、女性が家事や育児、介護などを担うという性別役割分担意識の根強さがうかがわれる。**

## 3. 子育てや教育について（P31～）

### 【問4】希望する子どもの育て方（P31～）

- ・「女の子も男の子も、こだわりなく育てたほうがよい」52.9%、「ある程度は女の子は女らしく、男の子は男らしく育てたほうがよい」34.5%、「女の子は女らしく、男の子は男らしく育てたほうがよい」8.1%。（P31・図 4-1）
- ・性別で見ると、女性は「こだわりなく育てたほうがよい」が56.8%と半数を超え、男性より10.6ポイント高い。男性の方が「ある程度は」も含め、『女の子らしく、男の子らしく育てたほうがよい』という回答が多い。（P31・図 4-2）
- ・経年比較をみると、平成22年度調査では、『女の子らしく、男の子らしく育てたほうがよい』という割合が女性で6割以上、男性で7割以上だったが、今回の調査ではその割合が低くなり、「こだわりなく育てたほうがよい」が男女とも20ポイント以上増加した。（P32・図 4-3）



**この10年間で「女の子も男の子も、こだわりなく育てたほうがよい」という考えが大きく増加（女性5割、男性4割に）し、子どもの育て方についての考えが変化している。**

#### 【問5】子どもの将来像（P33～）

- ・女の子は、「思いやりのある人」が75.3%で突出して高い。男の子は、「思いやりのある人」が42.3%、「家庭を大切にする人」29.1%、「判断力のある人」22.2%、「責任感の強い人」18.3%、「経済力のある人」16.5%と続く。(P33・図5-1)
- ・性別にみると、女の子は、男女ともに「思いやりのある人」が最も高く、女性で77.8%、男性で71.9%。次いで、女性は「身の回りのことは自分でできる人」が26.3%、男性は「家庭を大切にする人」が28.1%となっており、「家庭を大切にする人」は男性の方が12.9ポイント高い。男の子についても、男女ともに「思いやりのある人」が最も高く、女性で43.7%、男性で41.1%。次いで、「家庭を大切にする人」が女性で30.3%、男性で27.6%となっている。(P34・図5-2)



**女の子・男の子とも「思いやりのある人」が最も多いが、女の子のほうが男の子より33ポイント高い。男の子には「判断力」「責任感」「経済力」なども望まれており、女の子への希望とは異なっている。**

#### 【問6】子どもに受けさせたい教育の程度（P36～）

- ・女の子は、「四年制大学卒業程度」が62.9%、「短大・高専卒業程度」が16.2%。男の子は、「四年制大学卒業程度」が76.1%、「大学院修了程度」が9.6%、「高等学校卒業程度」が4.8%。(P36・図6-1)
- ・『四年制大学卒業以上』（「四年制大学卒業程度」と「大学院修了程度」を合わせた合計）の割合は、女の子のほうが高く、女の子との割合の差は、女性で19.9ポイント、男性で14.6ポイントであり、男女とも男の子に対してより高い学歴をつけさせたいという希望が大きいことがわかる。(P36・図6-1)
- ・男の子に対して、女性は60歳代・70歳以上、男性は30・40歳代と70歳以上で「大学院卒」の割合がやや高い。(P37・表6-1、表6-2)

### 4. 仕事について（P39～）

#### 【問7】女性が仕事に就くことについての考え（P39～）

- ・男女ともに「子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続ける」が高く、「子育ての時期だけ一時やめ、その後はフルタイムで仕事を続ける」、「結婚、出産に関わらず、仕事を続ける」を合わせると、女性で77.1%、男性で67.8%と、女性が仕事を続けることに賛成する割合は女性の方が9.3ポイント高くなっている。(P40・表7-1)
- ・年代別にみると、女性では30歳代で「結婚、出産に関わらず、仕事を続ける」が高くなっている。(P40・表7-1)
- ・経年比較をみると、男女ともに「子育ての時期だけ一時やめ、その後はフルタイムで仕事を続ける」と「結婚、出産に関わらず、仕事を続ける」は大幅に高くなっている。一方、結婚・出産後は家庭や子育てに専念するという人は、平成22年度調査より男女とも減少しており、男性で「子どもができるまで仕事に就き、子どもができれば家事や子育てに専念する」が大幅に低くなっている。(P42・図7-3)



**結婚・出産で仕事を一時やめても、女性が何らかのかたちで仕事を続けるという考えが主流となってきている。**

#### 【問8】女性が働き続ける上で困難だと思うこと（P43～）

- ・「保育所、学童保育室の不足」が 65.7%、「配偶者・パートナーが家事・育児に消極的」が 53.3%、「家事」が 52.0%。(P43・図 8-1)
- ・女性は「配偶者・パートナーが家事・育児に消極的」が 61.5%と男性より 20.7 ポイント高くなっている。一方、男性が次に多い項目は、「家事」47.2%、「育児、子どもの教育」46.4%。(P43・図 8-1)
- ・経年比較をみると、「配偶者・パートナーが家事・育児に消極的」は女性で 12.1 ポイント、男性で 8.5 ポイント、「配偶者・パートナーの転勤」は女性で 12.4 ポイント、男性で 13.9 ポイント増加。(P45・図 8-2)



**「保育所、学童保育室の不足」は以前から最も多いが、「配偶者・パートナーが家事・育児に消極的」なことが、女性の就労を困難にしている人が多くなっている。**

#### 【問9】職場における男女格差の有無（P46～）

- ・「特にない」が 48.2%で最も高い。次いで、「女性の昇進・昇格が遅い、あるいは望めない」15.1%、「女性は男性の補助業務や雑用が多い」14.7%、「女性にはつけないポスト・職種がある」13.3%。(P46・図 9-1)
- ・性別でみると、女性は「家族手当が女性にはつかない」が 15.6%で男性より 13.2 ポイント高い。男性は「募集人数や採用条件で、女性は男性より不利である」が 12.1%で女性より 5.6 ポイント高くなっている。(P46・図 9-1)
- ・経年比較をみると、男女とも多くの項目で低くなっていて、「特にない」が増加している。(P49・図 9-3)

#### 【問10】現在仕事をしていない最大の理由（P50～）

- ・「高齢だから」が 36.7%で最も高く、次いで「定年で退職したから」が 16.6%。(P50・図 10-1)
- ・女性の 30 歳代では「子どもが小さいから」を、50 歳代では「家族に介護を必要とする人がいるから」の回答割合が高い。(P51・表 10-1)

### 5. ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)について (P52～)

#### 【問11】生活の中で優先したいこと(希望)、していること(現実) (P52～)

- ・希望は、「仕事、家庭や地域活動、個人の生活の 3 つとも大切にしたい」31.1%、次いで「個人の生活を優先したい」18.2%、「仕事、個人の生活をともに優先したい」が 16.7%。(P52・図 11-1)
- ・現実には、「仕事を優先している」が 21.0%で最も高く、次いで「個人の生活を優先している」16.7%、「仕事、個人の生活をともに優先している」が 13.3%。(P52・図 11-1)
- ・性別でみると、希望は、「仕事を優先したい」は男性が 4.1 ポイント高く、「家庭や地域活動、個人の生活をともに優先したい」は女性が 3.2 ポイント高い。(P53・図 11-2)
- ・現実では、女性で「個人の生活を優先している」が 15.7%、僅差で「仕事を優先している」が 14.0%。男性では「仕事を優先している」が 32.7%と特に高くなっている。(P53・図 11-2)



**希望としては「仕事、家庭や地域活動、個人の生活の 3 つとも大切にしたい」が多いものの、現実には、女性は個人の生活や仕事、男性は仕事を優先している。**

## 6. 介護について(P58～)

### 【問12】希望する家族の介護形態 (P58～)

- ・「ホームヘルパーやデイサービス等を利用しながら主に自宅で介護したい(している)」が 45.7%、「特別養護老人ホーム、有料老人ホーム等の施設に入所させたい(入所させている)」が 33.1%。(P58・図 12-1)
- ・性別にみると、女性では「ホームヘルパーやデイサービス等を利用しながら主に自宅で介護したい(している)」が5割を超えており、男性より 13.2 ポイント高くなっている。男性では「ホームヘルパーやデイサービス等を利用しながら主に自宅で介護したい(している)」と「特別養護老人ホーム、有料老人ホーム等の施設に入所させたい(入所させている)」がそれぞれ 38.0%、38.8%とほぼ同率。(P59・表 12-1)
- ・経年比較をみると、男女とも「自宅での介護」が減少し、「施設に入所」の割合が増えている。(P60・図 12-2)

### 【問12-1】自宅で介護する場合、予想される主担当者 (P61～)

- ・「主に、自分が介護すると思う(している)」が 58.5%で最も高く、「主に、配偶者・パートナーが介護すると思う(している)」が 21.8%、「主に、その他の家族(女性)が介護すると思う(している)」が 8.6%。(P61・図 12-3)
- ・性別にみると、「主に、自分が介護すると思う(している)」は女性で 67.6%、男性で 40.1%。「主に、配偶者・パートナーが介護すると思う(している)」は女性で 14.7%だが、男性は 36.5%となっている。(P62・表 12-2)
- ・経年比較をみると、女性の回答に大きな変化はみられていないが、男性は「主に、配偶者・パートナーが介護すると思う(している)」が低くなる一方で「主に、自分が介護すると思う(している)」が2割から4割へとになっており、顕著な変化がみられている。(P63・図 12-4)



**男性も自分が介護を担うという認識が増え、変化がみられる。**

### 【問13】希望する自身の介護の形態 (P64～)

- ・「特別養護老人ホーム、有料老人ホーム等の施設に入所したい」が 48.4%で最も高く、「ホームヘルパーやデイサービス等を利用しながら主に自宅で介護してもらいたい」32.9%。(P64・図 13-1)
- ・性別にみると、「特別養護老人ホーム、有料老人ホーム等の施設に入所したい」は女性の方が 7.2 ポイント高い。(P65・表 13-1)
- ・経年比較をみると、男女ともに自宅介護の希望が低くなっている一方で「特別養護老人ホーム、有料老人ホーム等の施設に入所したい」が高くなっている。(P65・図 13-2)
- ・希望する介護形態で、問12の家族の場合と問13の自身の場合を比較すると、男女とも、家族の場合は「主に自宅で介護」を希望する割合が女性 51.2%、男性 38.0%が高くなっているが、自身の場合は「主に自宅で介護」の割合は男女とも減少し、「施設入所」を希望(女性 51.1%、男性 43.9%)する割合が高くなっている。(P59・表 12-1、P65表 13-1)

### 【問13-1】希望する自身の介護者（P66～）

- ・「配偶者・パートナー」が55.6%で最も高く、次いで「娘」が18.0%。（P66・図13-3）
- ・性別にみると、男女ともに「配偶者・パートナー」が高く、男性の方が27.0ポイント高い71.5%。（P67・表13-2）
- ・経年比較をみると、男女ともに「配偶者・パートナー」が低くなり、「わからない」が高くなっている。（P68・図13-4）



依然として、男性の7割は配偶者・パートナーに、女性の2割以上が娘に介護されたいと考えている。

## 7. 男女の人権について(P69～)

### 【問14】配偶者やパートナーからの暴力の認識（P69～）

- ・「どんな場合でも暴力だと思う」は、「交友関係や電話を細かく監視される」、「何を言っても無視される」は6割台、「ポルノビデオやポルノ雑誌を見せられる」、「行動を制限される」は7割台となっており、これらの項目は「場合によっては暴力だと思う」が18.7%～28.3%を占めている。（P69・表14-1）
- ・性別にみると、ほとんどの項目で、「どんな場合でも暴力だと思う」の割合は女性の方が高くなっている。（P70～71・表14-2）

### 【問15】配偶者やパートナーからの暴力の有無（P72～）

- ・全項目で「まったくない」が8割以上を占めている。（P73・表15-1）
- ・暴力が『あった』（「何度もあった」と「1、2度あった」の合計）は、「大声でどなられたり、脅されたりする」で11.6%、「何を言っても無視される」で11.2%、「『誰のおかげで生活できるんだ』『甲斐性なし』『お前は馬鹿だ』『あなたは駄目な人間だ』などと言われる」で8.7%と、他の項目に比べて高い（P72・図15-1）。
- ・性別にみると、男女ともに暴力が『あった』は「何を言っても無視される」で女性が10.6%、男性が12.0%。女性では暴力が『あった』は「大声でどなられたり、脅されたりする」13.2%、「『誰のおかげで生活できるんだ』などと言われる」10.6%、「嫌がっているのに性的な行為を強要されたり、避妊に協力しない」で9.2%、「命に関わるほどではないが、殴る、蹴るなどの暴力を受ける」で8.9%。（P72・図15-1）
- ・経年比較でみると、男性では「何を言っても無視される」の『あった』割合が高くなっている。（P77・図15-2）



『あった』の割合が、精神的暴力である「大声でどなられたり、脅されたりする」「何を言っても無視される」はいずれも10%を超えており、身体的暴力である「命に関わるほどではないが、殴る、蹴るなどの暴力を受ける」は7.4%となっている。

### 【問15-1】配偶者やパートナーからの暴力の相談相手（P78～）

- ・「どこにも相談しなかった」が57.3%で最も高く、次いで「友人・知人に相談した」19.7%、「家族・親戚に相談した」18.8%。（P78・図15-3）
- ・性別にみると、「どこにも相談しなかった」は男性で74.6%と高く、女性より24.3ポイント高くなっている。女性では「友人・知人に相談した」、「家族・親戚に相談した」が約2割で、男性より高くなっている。（P78・図15-3）

### 【問15-2】配偶者やパートナーからの暴力の相談先を知った手段（P81～）

- ・公的機関の相談窓口相談した人9人がその相談窓口を知った手段は、「インターネット（ホームページ、SNS など）」が 55.6%（5人）で最も高く、次いで「市の広報誌」が 22.2%（2人）。（P81・表 15-4）

### 【問15-3】配偶者やパートナーからの暴力を相談しなかった理由（P82～）

- ・「相談するほどのことではないと思った」が 54.4%で最も高く、「相談しても無駄だと思った」28.0%、「自分さえ我慢したら、何とかこのままやっていけると思った」と「自分にも悪いところがある」がともに 22.4%。（P82・図 15-5）
- ・性別にみると、「相談するほどのことではないと思った」は男性で 59.6%となっており、女性より 7.7 ポイント高い。「自分さえ我慢したら、何とかこのままやっていけると思った」は女性が 9.0 ポイント、「自分にも悪いところがある」は男性が 8.2 ポイント高くなっている。（P82・図 15-5）

### 【問16】配偶者から暴力を受けた場合の相談機関で知っているもの（P84～）

- ・「警察」が 84.1%で最も高く、次いで「市役所の人権・男女共同参画課」が 23.8%、「市役所のその他の部署」が 15.9%、「大阪府女性相談センター」が 13.7%となっており、「警察」以外の認知は低い。（P84・図 16-1）
- ・経年比較をみると、男女ともに「警察」、「市役所の人権・男女共同参画課」、「市役所のその他の部署」、「民間の機関（NPO法人等）」は前回調査と比べて高くなっており、「警察」は女性で 21.6 ポイント、男性で 18.3 ポイントの増加となっている。前回調査と同一項目は概ね認知率が高くなっている。（P86・図 16-2）

### 【問17】デートDVの認識（P87～）

- ・「どんな場合でも暴力だと思う」の割合が相対的に低い項目「相手の都合や意見を聞かず、二人のことを何でも自分で決める」の回答においては、「場合によっては暴力だと思う」が 47.0%と最も多く、他の項目よりも「暴力だとは思わない」の割合が高い。「相手がどこで何をしているのか気になり、必要以上にメール、SNS、携帯電話で細かくチェックする」は、「どんな場合でも暴力だと思う」「場合によっては暴力だと思う」がほぼ同程度で 4 割程度である。（P87・表 17-1）
- ・性別にみると、「友人との付き合いに干渉する、他の人との付き合いをさせない」では、「どんな場合でも暴力だと思う」は女性が 9.5 ポイント、「場合によっては暴力だと思う」は男性が 11.9 ポイント高くなっており、男女で認識の差がややみられる。他の項目では性別による違いはほとんどみられていない。（P88～89・表 17-2）



友人との付き合いに干渉することについて、女性の方が男性に比べ、暴力であると思っている。

### 【問18】受けたことがあるセクシュアル・ハラスメント行為（P90～）

- ・行為が『あった』（「何度もあった」と「1, 2度あった」の合計）は9項目中6項目で 15%以上を占めており、そのうち「女のくせに、男のくせにといった発言をする」、「容姿や服装についてあれこれ言う」、「未婚、結婚、離婚、妊娠、恋人の有無等についてあれこれ言う」、「性的なジョークや卑猥なことを言う」でいずれも2割台。（P90・図 18-1）
- ・ほとんどの項目で行為が『あった』は女性の方が高くなっている。男性は「女のくせに、男のくせにといった発言をする」「容姿や服装についてあれこれ言う」で行為が『あった』が約2割となっている。（P90・図 18-1）
- ・経年比較をみると、ほとんどの項目で平成 22 年度調査よりも割合が高くなっており、特に「女のくせに、男のくせにといった発言をする」は女性で 25.7 ポイント、男性で 17.8 ポイント高くなっている。（P94・図 18-2）



**男女ともセクハラ行為を受けた割合が増加。**

**ハラスメントに対する意識が高まり、以前より被害に気づく人が増えたと考えられる。**

### 【問18-1】セクシュアル・ハラスメントを受けた相手（P95～）

- ・「職場の上司」が 54.7%で最も高く、次いで「職場の同僚」32.3%、「家族・親戚」30.4%。（P95・図 18-3）
- ・性別にみると、女性では「職場の上司」が 62.8%と最も高く、男性より 27.3 ポイント高い。男性では「職場の同僚」が 39.7%と最も高く、女性より 10.6 ポイント高くなっている。また、男性では「友人」27.3%、「上級生・同級生」19.0%となっており、女性との差が目立つ。（P95・図 18-3）

### 【問18-2】セクシュアル・ハラスメントを受けた際の相談相手（P97～）

- ・「誰にも話していない」が 46.0%で最も高く、次いで「同僚・友人」39.2%、「家族・親戚」16.3%。（P97・図 18-4）
- ・性別にみると、女性では「同僚・友人」が 45.6%、「家族・親戚」が 20.6%で、男性では「同僚・友人」が 24.8%となっている。「誰にも話していない」は男性で 66.1%となっており、女性より 27.9 ポイント高くなっている。（P97・図 18-4）

### 【問19】「男はつらい」と感じることの有無（P99～）

- ・「ある」が 37.2%、「ない」が 57.9%。3人に1人が「男はつらい」と感じることもあると回答。（P99・図 19-1）
- ・年代別にみると、「ある」は 50 歳代が最も高く5割を超えており、70 歳以上で約2割と低くなっている。（P99・図 19-2）

### 【問19-1】「男はつらい」と感じる内容（P100～）

- ・「仕事の責任が大きい、仕事ができなくて当たり前と言われる」が 41.8%で最も高く、「妻子を養うのは男の責任だと言われる」38.4%、「男性が弱音を吐いたり、悩みを打ち明けるのは恥ずかしいこととされている」37.0%、「なにかにつけ『男だから』『男のくせに』と言われる」32.9%、「自分のやりたい仕事を自由に選べないことがある」29.5%となっている。（P100・図 19-3）
- ・30 歳代では「妻子を養うのは男の責任だと言われる」が 64.3%と、他の年齢層に比べて高くなっている。（P101・表 19-1）



**男性の3人に1人が「男はつらい」と感じている。**

**仕事ができ、一家を支えて当然という「大黒柱」としての重圧に悩んでいる。**

## 8. 防災・災害復興対策について(P102～)

### 【問20】防災・災害復興対策に対する考え方 (P102～)

- ・「着替えや授乳のための部屋を用意すべきだ」、「避難所を運営するメンバーに男女が同じように加わることは重要だ」では「そう思う」が過半数を占めており、『そう思う』が9割以上と高くなっている。(P102・図 20-1)
- ・「仮設トイレを男女別に設置できないことがあっても、やむを得ない」と「洗濯物干し場を男女別に設置できなくてもやむを得ない」では『そう思う』が5割を超えており、『そう思わない』よりも高くなっている。(P102・図 20-1)
- ・性別にみると、「仮設トイレを男女別に設置できないことがあっても、やむを得ない」、「洗濯物干し場を男女別に設置できなくてもやむを得ない」では、『そう思わない』のは女性の方が上回っている。(P103・表 20-1、P105・表 20-5)
- ・年代別にみると、「仮設トイレを男女別に設置できないことがあっても、やむを得ない」では、『そう思わない』の割合は女性の40歳代・50歳代・60歳代で5割を超えているが、30歳代以下は、『そう思う』が5割以上を占めている。一方、男性は『そう思う』がどの年代も5割以上。(P103・表 20-1)
- ・「性的な被害を受けないように自分で気をつけるべきだ」では、『そう思う』がどの年代も高く、年齢による差はない。(P106・表 20-8)



「性的な被害への配慮」は、低い年代でも、避難所の設置者より「個人が気をつけるべき」と考える人が多い。

## 9. 男女共同参画社会の推進に向けて(P107～)

### 【問21】男女共同参画社会に関する考え方や気づきに役立ったもの (P107～)

- ・「新聞の記事・テレビ番組」が32.6%で最も高く、次いで「特にない」30.3%、「広報紙、パンフレット、冊子など」が23.7%。(P107・図 21-1)
- ・女性では「特にない」が32.1%で最も高い。多くの項目で男性の方が高くなっており、「職場研修」で9.9ポイント、「新聞の記事・テレビ番組」で5.7ポイント、「市ホームページ等、インターネットでの広報」で4.2ポイント、女性より高くなっている。(P107・図 21-1)
- ・男女ともに10・20歳代では「学校での男女共同参画教育」が突出して高く、男女ともに50歳代以上では「新聞の記事・テレビ番組」が高くなっている。女性は年代が上がるほど「広報紙、パンフレット、冊子など」が高くなっている。「職場研修」は男性の50歳代で36.1%と高くなっている。一方、女性の30～40歳代、男性の40歳代では「特にない」が約5割を占めている。(P108・表 21-1)



「新聞の記事・テレビ番組」「広報紙、パンフレット、冊子など」が気づきに役立っている。

### 【問22】見たり聞いたりしたことがある男女共同参画に関する用語（P109～）

- ・『知っている』は、「男女雇用機会均等法」が 83.5%、「育児・介護休業法」が 79.6%、「ジェンダー」が 76.7%、「LGBT」が 67.2%と高くなっているが、いずれも「内容まで知っている」は3割前後。「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）」は『知っている』が 17.9%と低くなっている。（P109・図 22-1）



**「男女雇用機会均等法」「育児・介護休業法」の認知度は男女ともに約8割と高くなっている**

### 【問23】多様な生き方をしている人との関わりの程度（P113～）

- ・「家事・育児・介護等を行う男性」を除いて「いない、わからない」が8割以上。「別姓で暮らしている夫婦・カップル」、「1か月以上の育児休業を取得した男性」、「セクシュアル・マイノリティ(性的少数者)」で「知人にいる」が約1割となっている。「家事・育児・介護等を行う男性」では、「知人にいる」が 19.6%、「家族や親戚にいる」が 13.1%となっている。（P113～115・表 23-1）
- ・男女ともおおむね若い年代のほうが、多様な生き方をしている人が身近にいる割合が高い傾向がみられている。（P113～115・表 23-1）

- ・多様な生き方をしている人との関わりの程度別に問1の結婚や家族に関する意見や考え方に対する回答をみると、多様な生き方をしている人が家族や親戚にいたり、親しい友人にいたりという人のほうが「いない、わからない」人に比べ、ほぼすべての項目で「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくても、どちらでもよい」等の項目で『そう思う』（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）の割合が高く、「夫は外で働き、妻は家庭を守る方がよい」や「自分の家族や親せきに同性愛者はいてほしくない」等の項目では『そう思う』の割合が低い。（P116・表 23-2）



**関わりの程度が高いほど、多様な家族のあり方を肯定したり、性別役割分業には否定的で、同性愛者に対する忌避意識が弱いという回答傾向がみられる場合が多いといえる。**

### 【問24】高槻市立男女共同参画センターの認知度（P118～）

- ・「知らない」が 75.8%で最も高く、次いで「知っているが、利用したことはない」19.8%、「利用したことがある」は 0.7%。（P118・図 24-1）
- ・女性の 60 歳代と男性の 10・20 歳代で「利用したことがある」がそれぞれ 4.3%、3.0%みられ、『知っている』（「利用したことがある」と「知っているが、利用したことはない」の合計）が女性の 60 歳代で 25.8%、男性の 10・20 歳代で 29.9%と他の年齢層に比べてやや高くなっている。（P118・表 24-1）

### 【問25】相談窓口の認知度（P119～）

- ・相談窓口の認知度は、いずれの相談も「知らない」が過半数を占め、「大阪府の男性相談」は 84.6%。いずれの相談も「利用したことがある」は1%以下。「知っているが、利用したことはない」は、「高槻市の人権相談」が 41.5%と他の相談と比べて認知度が高くなっている。（P119・図 25-1）
- ・性別にみると、『知っている』（利用したことがある」と「知っているが、利用したことはない」の合計）は、「高槻市の女性相談」は女性の方が 5.0 ポイント高く、「大阪府の男性相談」は 男性の方が 3.7 ポイント高くなっている。女性の 60 歳代では「高槻市のDV相談」で『知っている』が 46.3%。（P120・表 25-1）

### 【問26】関心のある高槻市立男女共同参画センターの事業（P121～）

- ・「誰でも立ち寄れる交流の場」が 29.9%で最も高く、次いで「男性の料理、家事一般、介護、子育て教室など男性を対象とする実践的な講座」が 23.6%。(P121・図 26-1)
- ・女性では「誰でも立ち寄れる交流の場」の次に「子育て中、介護中の女性や男性の交流の場」が高くなっており、男性では「男性の料理、家事一般、介護、子育て教室など男性を対象とする実践的な講座」が最も高く 35.2%である。女性の関心がより高く、男性との差が大きい講座は、「就職・再就職を目指す女性のための講座」「女性がビジネススキルを学べる実践的な講座」「起業を目指す女性のための講座」。(P121・図 26-1)
- ・年代別にみると、「誰でも立ち寄れる交流の場」は男女ともに 60 歳代で高く4割を超えている。「男性の料理、家事一般、介護、子育て教室など男性を対象とする実践的な講座」は男性の 30 歳代で高く5割を超えている。講座関係の事業は男女とも概ね若年層で高くなっている中で、「ワーク・ライフ・バランスや働き方改革に関する講座」は男性の 50 歳代で 30.1%と高くなっている。(P122・表 26-1)



**男女共同参画センターには「誰でも立ち寄れる交流の場」が求められている。**

**講座では、男性は家事等の実践講座、女性は仕事に関わる講座に関心があると思われる。**

### Ⅲ 小学生から高校生へのアンケート調査の結果

#### 1. 回答者の属性と家庭における手伝いについて(P127～)

##### 【問1】性別 (P127)

- ・小学生は「女子」51.1%、「男子」が 46.2%。中学生は「女子」42.8%、「男子」51.9%。高校生は「女子」48.2%、「男子」47.1%。いずれの学年も「女子／男子では答えられない」は 1.3%で、18 歳以上の 0.6%より高くなっている。(P127・図 1-1)

##### 【問2】家庭における手伝いの状況 (P128)

- ・「食事のしたく」、「洗たく物たたみ」、「ふろ掃除」、「ゴミ出し」、「家族の世話」で学年が高くなるほど、手伝いの割合は低くなる傾向にある。「どれもない」は、学年が高くなるほど増加している。(P128・図 2-1)
- ・すべての学年の女子で「食事のしたく」、「洗たく物たたみ」、「食器洗い」、「掃除」、「買い物」、「洗たく」、「家族の世話」が男子に比べて高く、すべての学年の男子で「ふろ掃除」、「ゴミ出し」が女子に比べて高い傾向にある。(P129・図 2-2)

#### 2. 「男だから」「女だから」と言われた経験(P130～)

##### 【問3】「男だから」「女だから」と言われたことの有無 (P130～)

- ・『言われる』(「よく言われる」と「ときどき言われる」の合計)は、小学生 24.6%、中学生 29.5%、校生 26.0。小学生は「まったく言われぬ」が 44.1%で他の学年と比べて 10 ポイント以上高くなっている。(P130・図 3-1)
- ・性別にみると、すべての学年の男子で「まったく言われぬ」の割合が高くなっている。いずれの学年も『言われる』は女子のほうが高くなっており、男子との差は学年が高くなるほど大きくなっている。(P130・図 3-2)
- ・中学生の経年比較をみると、男女とも『言われる』割合は大幅に低くなっている。(P131・図 3-3)



**「男だから」「女だから」と言われる割合は3割以下になっている。**

**全ての学年で、女子の方が『言われる』割合は高く、学年が高くなるほど男子との差は大きくなる。**

##### 【問3-1】「男だから」や「女だから」と言われた理由 (P132～)

- ・すべての学年で「言葉づかい」、「性格」、「座り方」の3項目が上位。小学生で「泣いたとき」、中学生で「整理整頓」、高校生で「家に帰る時間」が、他の学年と比べてそれぞれ高くなっている。(P132・図 3-4)
- ・性別にみると、すべての学年の女子で「言葉づかい」、「座り方」、「服そうや髪型」、「整理整頓」、「家に帰る時間」、「友達関係」、「歩き方」、「食事の仕方」が男子に比べて高く、すべての学年の男子で「遊び・スポーツ」、「泣いたとき」、「勉強」が女子に比べて高い傾向にある。特に、「言葉づかい」、「座り方」、「泣いたとき」は男女差が大きくなっている。(P133・図 3-5)
- ・中学生の経年比較をみると、男女ともほとんどの項目で回答割合が低くなっている。(P134・図 3-6)



**男女差が大きく、女子の割合が高いのは「言葉づかい」「座り方」、男子は「泣いたとき」「遊び・スポーツ」。**

**大人にジェンダー意識があり、女の子・男の子で言われる理由に違いがある。**

### 【問3-2】「男だから」や「女だから」と言った人 (P135～)

- ・すべての学年で「母」が5割以上、「父」が3割程度。「友達」、「きょうだい」は学年が低くなるほど、「祖母」は学年が高くなるほど、割合が高くなっている。(P135・図 3-7)
- ・中学生の経年比較をみると、男女とも家族や親せきの割合が低くなっている一方で、「友達」はわずかに高くなっている。(P137・図 3-9)

### 【問3-3】「男だから」や「女だから」と言われたときの気持ち (P138～)

- ・すべての学年で「いやな気持ちがあった」が3割台後半。(P138・図 3-10)
- ・男女とも学年が高くなるほど「その通りだと思った」が低く、「なんとも思わなかった」が高くなる傾向にある。(P138・図 3-11)
- ・中学生の経年比較をみると、女子は「なんとも思わなかった」が 11.8 ポイント高くなっているが、男子は「いやな気持ちがあった」が 8.6 ポイント高くなっている。(P139・図 3-12)

## 3. 性別による役割分担の意識 (P140～)

### 【問4】家庭における性別による役割分担の意識 (P140～)

- ・いずれの学年もすべての項目で「女性と男性が同じ程度にするのがよい」の割合が高く、5割を超えている。「生活費をかせぐ」を除いた項目で、学年が高くなるほど「女性と男性が同じ程度にするのがよい」の割合が高くなっている。いずれの学年も、「生活費をかせぐ」は「女性と男性が同じ程度にするのがよい」が5割台、「主に男性がするのがよい」が3割前後で、学年ごとに大きな差はみられない。(P140・図 4-1)



日常の家事の項目は、主に女性が担うと考える割合が他に比べて高い。  
学年が上がるにしたがって「女性と男性が同程度」が増え、「主に女性」が減少する。

### 【問5】学校生活における性別による役割分担の意識 (P144～)

- ・「重い物を運んだり、力がある仕事をする」を除いた項目で、学年が高くなるほど「男女で変わらないと思う」の割合がおおむね高くなっている。「掃除や整理整頓をする」は学年が高くなるほど「女子のほうが向いていると思う」の割合が低くなっている。(P144・図 5-1)
- ・高校生では、「数学や理科の勉強」は「男子のほうが向いていると思う」が女子で 16.1%と男子より 7.6 ポイント高く、「国語の勉強」は「女子のほうが向いていると思う」が女子で 12.9%、男子で 6.1%。(P147・図 5-4)



項目によっては、性別役割分担意識や男性・女性の特性にとらわれた回答がみられる。

## 4. 男女平等について(P148～)

### 【問6】男女の地位の平等感 (P148～)

- ・「学校の間では」と「地域活動の間では」を除いた項目で、学年が高くなるほど『男性優遇』(「男性が優遇されている」と「どちらかといえば男性が優遇されている」の合計)の割合が高くなっている。「学校の間では」では『女性優遇』(「女性が優遇されている」と「どちらかといえば女性が優遇されている」の合計)が中学生で25.4%と他の学年と比べて高くなっている。「仕事の間では」は「わからない」が小学生で4割を占めている。(P148・図6-1)
- ・18歳以上が対象の市民意識調査(問2 男女の地位の平等感)と比較すると、いずれの分野も「平等である」の回答割合が小学生から高校生の回答の方が高い。(P148・図6-1、P18・図2-1)

### 【問7】結婚や家族に関する考え方(P151～)

#### (ア) 結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくても、どちらでもよい

- ・学年が高くなるほど、『そう思う』の割合が高くなっており、中学生と高校生で『そう思う』がそれぞれ9割を超える。小学生では「わからない」が1割。(P151・図7-1)
- ・すべての学年の女子で『そう思う』が男子より高く、中学生と高校生の女子で「そう思う」が9割を超える。(P152・表7-1)

#### (イ) 結婚しても、必ずしも子どもをもつ必要はない

- ・学年が高くなるほど、『そう思う』の割合が高くなっており、高校生で『そう思う』が9割を超えている。小学生では『そう思わない』の合計)が17.1%、「わからない」が12.5%。(P151・図7-1)
- ・すべての学年の女子で『そう思う』が男子より高く、高校生の女子で「そう思う」が9割。(P152・表7-2)

#### (ウ) 女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てるべきだ

- ・学年が高くなるほど、「そう思う」の割合が低くなっているが、『そう思う』の割合では大きな差はみられない。小学生では「わからない」が11.7%。(P151・図7-1)
- ・すべての学年の男子で『そう思う』が女子より高くなっており、中学生の男子で『そう思う』が39.6%、女子で22.0%。(P153・表7-3)

#### (エ) 結婚したら、夫婦は同じ名字を名乗るべきだ

- ・高校生で『そう思う』が54.9%で、『そう思わない』(42.9%)よりも12.0ポイント高くなっている。(P151・図7-1)
- ・『そう思う』は男子が57.6%、女子が52.6%で、男子が5.0ポイント高い。(P153・表7-4)

#### (オ) 男同士、女同士の結婚を認めるべきだ

- ・学年が高くなるほど、『そう思う』の割合が高くなっており、高校生で約9割。小学生では『そう思う』が44.3%で、「わからない」が32.8%。(P151・図7-1)
- ・すべての学年の女子で『そう思う』が男子より高く、高校生の女子で『そう思う』が9割を超える。小学生の男子では「そう思わない」が18.0%とやや高くなっている。(P154・表7-5)

### 【問8】「LGBT」の認知度 (P155～)

- ・「LGBT」の認知度は、「意味を知っている」が中学生で5割台、高校生で8割台。中学生で「まったく知らない」が約2割。(P155・図8-1)
- ・すべての学年で「意味を知っている」は女子が男子よりも高くなっており、高校生の女子では約9割にのぼる。「まったく知らない」は中学生の男子で2割を超えている。(P155・図8-2)

### 【問9】現在の性別に生まれたことについての考え (P156～)

- ・学年が高くなるほど「よかったと思う」は低くなり、「なんとも思わない」が高くなる傾向にある。すべての学年で「わからない」が1割程度。また、いずれの学年でも「違う性別ならよかったと思う」「しっくりこないと思っている」の回答が合わせて5%前後。(P156・図9-1)
- ・すべての学年で「よかったと思う」は男子のほうが女子よりもやや高くなっている。逆に「違う性別ならよかったと思う」は女子のほうが男子よりも高い。(P156・表9-1)

## 5. 男女の人権について(P158～)

### 【問10】デートDVの認識 (P158～)

- ・「相手がどこで何をしているのか気になり、必要以上に電話やメール、SNSでひんぱんにチェックする」と「相手が自分の言うことを聞かないと怒る」を除くすべての項目で、「絶対にしてはいけない」がすべての学年で、それぞれ6～8割を占めている。(P158・図 10-1)
- ・「相手がどこで何をしているのか気になり、必要以上に電話やメール、SNSでひんぱんにチェックする」では「場合によってはしてもよい」がすべての学年で5割台。「相手が自分の言うことを聞かないと怒る」では「場合によってはしてもよい」がすべての学年で3割台。(P159・表 10-1)
- ・すべての項目において中学生・高校生とも女子で「絶対にしてはいけない」が、男子より高くなっている。(P160・図 10-2、P162・図 10-3)

### 【問11】デートDVの認知度 (P164～)

- ・中学生では「意味を知っている」が 34.7%、「まったく知らない」が 26.9%。高校生では「意味を知っている」が約7割。(P164・図 11-1)
- ・すべての学年で女子の「意味を知っている」、「聞いたことはあるが、よくは知らない」がそれぞれ男子よりも高くなっている。「まったく知らない」が中学生の男子で高く3割を超えている。(P164・図 11-2)
- ・経年比較をみると、認知度の変化はみられていない。(P165・図 11-3)

### 【問12】恋愛や性についての相談相手 (P166～)

- ・中学生、高校生ともに「友達」が最も高く、それぞれ 48.1%、67.1%で、高校生は7割近く。次いで中学生、高校生ともに「母」が 29.8%ずつ。「いない」は中学生が 16.5%、高校生が 11.3%。(P166・図 12-1)
- ・ほとんどの項目で女子のほうが男子より高くなっており、「母」は中学生で 20.2 ポイント、高校生で 15.2 ポイント女子のほうが高くなっている。一方、「父」は男子が女子より高い。「いない」も男子が女子より高くなっている。(P167・図 12-2)
- ・中学生の経年比較をみると、女子では「友達」「母」の回答が低くなっている。男子では「友達」がわずかに低くなっているが「母」「父」は高くなっている。(P168・図 12-3)

### 【問13】デートDVを受けた経験の有無 (P169～)

- ・『あった』(「何度もあった」と「1～2度あった」の合計)は、「人格を否定するような暴言を吐かれた」で 2.2%、「交友関係を細かく監視された」で7.1%、「あなたがいやがっているのに性的な行為を強要された」で3.1%。(P169・図 13-1)
- ・高校生の男女ともに『あった』は、「交友関係を細かく監視された」で女子が 8.8%、男子が 5.6%。男子に比べて女子で『あった』が高いのは「人格を否定するような暴言を吐かれた」3.2%、「あなたがいやがっている

のに性的な行為を強要された」4.8%。(P170・表 13-1)

**【問13-1】デートDVの相談相手 (P171～)**

- ・「友達」が9人で最も多く、次いで「相談しなかった」が5人、「ネット上の友達」が3人。(P171・表 13-2)
- ・性別にみると、「友達」が女子で6人、男子で3人。男子では「友達」以外の回答はみられない。「相談しなかった」は女子が4人、男子が1人。(P171・表 13-2)